



▲花の手入れに精を出す角田さん



▲花の銀行「みさき苑」入口

十二月というのに、花の銀行みさき苑には、コスモス・にちにち草など数種類の花が咲き誇り、海と花畑が美しくコントラストをなしていた。角田さんは地区の集りや、老人会などで花の苗を無料で配布し、昭和の花咲じいさんと親しまれている。「自然を愛し、花を愛することが健康の秘訣です」と八十歳とは思えないほどの若さで、今でも育苗、除草に精を出している。

角田さんの夢は、将来三角半島を花で飾ることだそう。花の苗一本一本にそそがれた愛情がそのうちにきつと実をむすぶことだろう。五十年熊日緑のリボン賞を受賞された。

### 花の銀行「みさき苑」頭取

三角町戸馳鬼塚 角田清治さん

## 明日の熊本 公民館活動促進事業に思う

岩 永 久 次



### 私の提言

県政の基本構想のなかで、「地域を基盤としたひとびとの連帯意識を深め、あたたかい心のふれあう地域社会の実現を図る（コミュニティづくり）」ということが、重点施策のひとつとして組み込まれていることは、時宜をえたことで、たいへん結構なことだと思ふ。また、その課題解決へのとりくみとして「公民館活動促進事業」がとりあげられていることについては、大いに賛成である。だが、気になる点がないでもない。さいわい機会を与えられたので、この課題について、社会教育という視点からの卑見を述べてみたい。

どんな事業をするにも、「ヒト」と「カネ」と「モノ」が必須の条件であることは言うまでもないが、この三者にプラスして、その事業を支える理念（思想）が問題である。社会教育の事業でいえば、社会教育のあり方の根本原理に対する正しい認識が問題になる。

わが国では、民衆の間に「うけたまわり学習」という姿勢が根強く残っておりそれが社会教育活動の隘路になっているという指摘がある。このことは、戦前の社会教育が精神主義に傾き、活動の場とか施設とかを軽視してきたという事実と無関係ではなさそうである。昭和初期のことだが、当時、社会教育としておこなわれた地域住民（おとな）の集いの会場として、一番多く使われたのは小学校、二番がお寺であったという統計がある。この事実を材料にしながら、ある論者は（戦後に）次のような解説をした。……

小学校は教師が未成熟な子どもたちに対し、お寺は僧侶が迷える衆生に対し、いずれも上から下へ、一方的に語りかけておからせるといふ点で共通した指導の場である。社会教育が小学校やお寺を会場としながら、このような上意下達的な民衆教化の型を踏襲してきた過程で、指導する側は人を集めて話をしてきかせることを社会教育と思ひこみ、民衆の側でも社会教育といえは何かたぬ話になる話を聞かせていただくことであると受けとめるような姿勢がづくりあげられてきた。……

これは少しなが過ぎた解説かもしれないが、事実として、戦前の社会教育では活動の場や施設を軽（無）視してきた。したがって、戦後、社会教育の総合

施設として、すべての市町村に公民館がつくられたということは、画期的なことであったと言つてよい。

だが、会場が小学校やお寺から公民館に移っても、活動のなかみは、依然として「うけたまわり学習」から脱皮しきれないままだった。それは指導する側が「ほどこし与える教育」観から脱皮できないできたことと表裏の関係にあるからだと考えられる。そのことは、公民館が登場してから三十年になろうというのに、いまだに公民館像がはっきり押えられていないという点に象徴されている。

いま、「公民館とは何か」のイメージを地域住民の前に明確、鮮明にアツピールし、それぞれの地域で客観的な位置づけを確立することは、社会教育関係者にとって最も重要な課題のひとつである。現実の公民館は、公会堂のようなものから、裁縫や料理の塾のようなものまで雑多であり、極端にいえば、何らかの社会教育に関係ある活動を行っているところはすべて公民館と呼ばれるために、公民館の性格をまったく曖昧なものにしていく。「公民館とは何か」を明確にしないまま、公民館活動を盛りあげようとする関係者たちの焦りが、いよいよ公民館に対する地域住民の正常な認識を失わしめているという傾向もある。

と、地区集会所建設費の補助が主柱になっているが、わたしは特に後者に注目したい。地域住民の身近なところに集会機能を中心とする施設をつくり、そこを日常的な親睦交流の場としながら、新しい地域社会づくりの拠点として位置づけ、これを計画的に育成援助するというこの事業に期待するところは大きい。

だがしかし、ここでも地区集会所の建設を育成援助することが、どんな意味で「公民館活動」の促進につながるのかという点は明確でない。公民館という呼称を避けて地区集会所としている理由がわからないではないが、少なくとも、それを「公民館活動促進事業」のなかに入れるからには、古くて新しい「公民館は施設か機能か？」という問題に対する解答が用意されていなければならないだろう。

そうした問題がはらまれているにせよ、地区集会所の育成援助事業がささい水になって、各地域ごとに「集められる」活動から「集まる」活動への土壌づくりが進展しはじめることを期待したい。同時に、もうひとつの柱であるボランティア・リーダー養成事業のなかで「公民館とは何か」のイメージの鮮明化を是非とも押し進めていただきたいものである。

（熊商大教授）